

地域ボランティア活動における保育学生の意識変化

川口潤子¹、龍田建次²

¹愛知学泉短期大学、²愛知学泉大学

Altered Consciousness of Students through Local Volunteer Activities

Junko Kawaguchi, Kenji Tatsuda

キーワード：ボランティア volunteer、保育者養成 nursery teacher training
地域貢献 local contribution

1. はじめに

本論は、2012年5月から11月にかけて、地域のまつり「花のとう」と、「岡崎げんき館」において、本学幼児教育学科の学生9名と本学家政学部家政学科家政学専攻の学生1名が、子どもたちとその保護者を対象に計4回のボランティア活動を行った実践記録である。

この活動は、筆者川口が担当する2年生の「幼児学ゼミナール」と、筆者龍田が担当する4年生の「卒業研究」の授業の一環として行った。

保育者を目指す学生にとって最も重要と考えられるのは、教室で学んだ知識や保育技術を、現場で実践していく力に結び付けることである。日頃の学習成果を踏まえながら行う実習や、子どもたちとのボランティア活動などの体験型学習の効果の高さは、すでに多くの先行研究からも読み取れる。幼児教育学科では、幼稚園・保育所・施設での「実習」や「保育内容と指導法の総合演習（こどもまつり）」、本稿にとりあげる2年生の「岡崎げんき館でのボランティア活動」などが学生の実践力育成の場となっている。

川口ゼミは、「子どもたちとの関わりの中で、表現の援助について考える」ことを目的に、毎年積極的に地域の子どものたちと関わるボランティア活動に参加している。学生たちは、4回の活動の中で実践と振り返りを繰り返し、保護者からの刺激も受けながら学びを深めている。

2. 研究の目的

学生たちが継続的に行なうボランティア活動における意識変化について調査し、子どもたちやその保護者と関わる体験型学習の教育的意義を明確にする。

3. 研究方法

上記期間に計4回の活動を行なったのは、短期大学生9名と、大学生1名である。(5月に2回/6月に1回/11月1回)

対象者は、地域に住む乳幼児から小学生とその保護者である。活動内容に応じて楽器・小道具・歌詞幕・パネルシアター用品・記録用ビデオ・iPod・スピーカーなどを用意した。音楽活動は、筆者川口ゼミの学生が担当し、音響機器の操作・ビデオ撮影・記録については、筆者龍田ゼミの学生が担当した。

活動後は、保護者と学生にアンケートを実施し、さらに学生だけの反省会、ビデオを用いた振り返りを行った(図1・図2)。

保護者向けのアンケートでは、当日参加した子どもの年齢・間柄・プログラムに対する満足度記入欄、自由記述欄などを設けた。学生向けのアンケートでは、当日の活動について、自己採点欄・自己評価欄・自由記述欄などを設けた。

図1 保護者アンケート記入例

1. お子様の性別と年齢・月齢、ご兄弟の構成 男の子・女の子、3才1ヶ月、構成

2. お子様との関係と年齢、お父様・お母様・おばあ様・その他()、主

3. 今日の活動は、100点のうち、何点でしたか?ご記入ください。 80 点

4. それぞれの遊びはいかがでしたか?ご感想を、番号に○を付けてお教えください。

(1) 「はじまるよ」の手遊び歌	良い →	①	2	3	4	—悪い
(2) 「しゃぼん玉」	良い →	①	2	3	4	—悪い
(3) 「ラララそうきん」	良い →	①	2	3	4	—悪い
(4) 「三匹のこぶた」	良い →	①	2	3	4	—悪い
(5) 「カレーライス」	良い →	①	2	3	4	—悪い
(6) 「さよなら あんころもち また」	良い →	1	②	3	4	—悪い

5. 今日の活動で、良かったと思われることをお教えください。
しゃぼん玉を伸ばしたり、ハネロヤ(?)を作ったり、子ども喜ぶように飽きないようにさせてくれた点です。

6. 今日の活動で、お感じになった改善点をお教えください。
声ももう少し大きいと良いと思います。

図2 学生アンケート記入例

1. 今日のあなたのパネルシアターは、うまくできましたか、できませんでしたか?あなたの感想を、下の番号に○を付けて教えてください。

うまくきた → 1 2 ③ 4 —できなかった

2. 今日のあなたのパネルシアターは、100点のうち、何点でしたか?自己採点してください。 50 点

また、その理由を書いてください。
声がいさかた。練習不足だった。笑顔が少なかった。進行が早かった。図が強く絵が細い人形と文字の中心に少しとびだした。

4. 実践内容

学生は、「初めての出会いの場を、子どもたちが気持ちよく過ごすこと」を目標にプログラムを企画した。活動内容は、以下のとおりである。

(1) 地域のまつり「花のとう」でのボランティア活動

活動日時：2012年5月13日(日)
13:30～、14:30～、15:30～
実施場所：愛知県岡崎市矢作町
対象者：「花のとう」に来場している幼児、小学生、その保護者
活動内容：パネルシアター
「カレーライス」「山の音楽家」
「ドレミのうた」「どうぞのいす」他

「花のとう」は、愛知県岡崎市矢作町の誓願寺(せいがんじ)と矢作商店街振興組合が毎年5月に開催するまつりである。約400年以上の歴史があると言われ、地元の幼稚園児から大学生までが関わり、誓願寺周辺にて作品展示・スタンプラリー・野外ステージ等のイベントが行われる。ゼミの学生は、パネルシアターのコーナーで3回にわたり、合計8つの作品を演じた。

パネルシアターとは、Pペーパー(不織布)に絵を描いて人・動物・風景などのパーツを作り、それを歌や話の進行に合わせてパネルボードに「貼り・外し」ながら演じる教材である。フランネルグラフ(画用紙にネルを貼りネル地のボードに貼りつける)がその原形と言われ、現在のPペーパーを用いたパネルシアターは、1973年に、浄土宗西光寺の住職である古宇田亮順氏が考案した。今日の

幼保現場に広く定着しているが、4月当初のゼミ生には、過去に制作した経験のあるものはいなかった。

学生たちは、4月の授業開始から5月の「花のとう」当日までの短い期間のなかでパネルシアターの準備を進めた。学内図書館の約70冊のパネルシアター関連の資料の中から気に入ったものを選び、絵柄をPペーパーに写して切り取り、色を塗ってパーツを制作した。そして、当日までに、パネル布やプラスチックボードでパネルボード作り、実際にパーツを動かしながら演じる練習をして当日を迎えた。

本番終了後の学生の振り返りでは、「練習不足だった」「声小さくなった」など、やや不満足な評価が多かった。また、野外で行なったため、風によってパネルボードに貼りつけたパーツが安定せずやりづらかった。一部には、「子どもた

ちが反応してくれてやりやすかった」といった感想もあった。

(2) 岡崎げんき館でのボランティア活動

活動月日：
●2012年5月31日（木）
●2012年6月7日（木）
●2012年11月1日（木）
活動時間：11：20～12：00
活動場所：「岡崎げんき館」（愛知県岡崎市）
対象者：3歳未満児とその保護者約20組

「岡崎げんき館」は、愛知県岡崎市が整備する、健康支援・生涯学習支援・子育て支援を行なう公共施設である。この「学泉のお姉さん・お兄さんと遊ぼう」は、学生が、3歳未満の子どもたちとその保護者を対象に、いろいろな「あそび」のプログラムを企画し、提供していくボランティア活動である。2012年度においては、年間33回開催された。

今回、3回に及ぶ活動において、初めて「保護者アンケート」を実施した。学生が行なった主な内容は、以下のとおりである。

【導入】
学生が、動物のパペットを手にはめ、子どもたちと保護者を迎えに行く。学生にとっては、子どもたちや保護者の様子を感じとるための時間であり、子どもたちや保護者にとっては、学生と関わるウォームアップとなる。
【はじまりの歌】
パペットを片付けた後、学生たちは、子どもたちと対面に床に座り、手遊びうた「はじまるよ」（作詞・作曲不詳）をうたう。
【季節の歌】
子どもたちや保護者がよく知っている「かたつむり」「シャボン玉」「大きな栗の木の下で」などをうたう。保護者が安心して活動に参加できるよう、歌詞幕を用意する。
【しゃぼん玉を楽しもう】
子どもたちがしゃぼん玉を見たり、触ったりできるよう、「しゃぼん玉」の音楽に合わせて、学生が部屋中にしゃぼん玉をとばす。
【ふれあいあそび】

親が子どもの身体をつついたり、撫でたりするふれあいあそび「ラララぞうきん」を行なう。2名の学生が親と子どもの役になり、やり方を示してから、全員で実施した。
【パネルシアター】
子どもたちが親しみやすい「三匹のこぶた」「カレーライス」「山の音楽家」を行なう。学生たちは、数人で役割分担をした。
【さよならの歌】
わらべうた「さよならあんころもち」を、手をつないでうたう。
【アンケート】
保護者に来て頂いたお礼を述べ、アンケートの協力をお願いした。
【さよならアーチ】
帰りたくない子どもたちも気持ちよく活動が終えられるよう、ゼミ生は二人組でアーチを作り、子どもたちは、そのアーチをくぐって帰った。

(3) 岡崎げんき館① 5月31日

今回の学生たちにとって、当館での活動は初めてであった。「シャボン玉を楽しもう」では、子どもたちは、部屋中にとばされたシャボン玉を指さしたり、追いかけてきた。

活動後の学生アンケートにおいては、「部屋から抜け出した子どもとも遊んで、お母さんに喜んでもらえた」「子どもたちや周りの様子をみながら、弾き歌いができた」といった実践ならではの記述の他、「予想以上に参加者が多くて戸惑った」「緊張した」との記述が多かった。全体にやや表情が硬く感じられた。

保護者アンケートには、表情や声の大きさ、パネルボードの位置についての指摘があり、次回に向けて改善することとなった。

(4) 岡崎げんき館② 6月7日

学生たちは、前回、保護者から指摘された点を改善しながら準備をすすめた。

また、今回は、パネルシアターの上演の際にiPodとスピーカーを用い、あらかじめ用意しておいた効果音を物語の進行に合わせて挿入した。「三匹のこぶた」では、家を建てる音、オオカミが息を吹きかける音を用いた。また、「カレーライス」では、食材を切る音、炒める音、カレ

一を煮込む音を用いた。

学生アンケートにおいては、「前回よりもできた」「2回目だったので、あまり緊張しなかった」という記述が多かった。保護者アンケートにも「前回より声がかきとりやすくなった」「前回より、かなり改善されていたと思う」とあった。

後日、撮影したビデオ映像をみながら振り返りを行った。

(5) 岡崎げんき館③ 11月1日

約5ヵ月ぶりの当館での活動であり、その間にゼミ生は2週間の保育所実習と、3週間の幼稚園実習を経ている。

前回の活動を振り返りながら、動き・声の大きさ・表情・服装を意識して、準備を進めた。学生たちは、係の仕事にも慣れ、当日の準備等は全て自分たちで行っていた。他方、子どもたちの前に立つことに少し慣れてきたせいか、やや緊張感が足りないようにも感じられた。

学生の振り返りでは、「流れがスムーズだったと思う」「お母さんも楽しそうでよかった」などの感想が多かった。

5. 結果と考察

(1) 地域のまつり「花のとう」でのボランティア活動

現場で使用できる作品が作りたい、と希望する学生が集まったゼミであったが、当日の学生の準備には個人差がみられた。待ち時間に入念に練習を行う学生もいれば、現地に集合してからもパーツの仕上げを行なっている学生もあった。本番は、全員がなんとか発表に間に合った。

学生にとって、「準備とは何か」「計画力とは何か」を、身をもって知るきっかけになった。

(2) 岡崎げんき館でのボランティア活動

初めは0歳から3歳未満児という子どもの発達段階のイメージが曖昧で、プログラムを考える際には混乱がみられた。学生は、毎回活動後に行った「保護者アンケート」「学生アンケート」「ビデオ映像」による振り返りの中で、自分やグループの課題を発見していった。保護者の協力を得ながら、園の実習ではほとんど経験できない親子活動について考える機会になった。

(3) 保護者アンケート

保護者は、学生たちの活動に終始協力的であり、アンケートにも丁寧に答えていただいた。

好意的な自由記述には、「学生さんの笑顔がよかった」「がんばってふれ合おうとしてくれていたのがよかった」「子どもがとても喜んで」「最初は誰でも初めて。どんどん経験を積んで立派な保育士さんになってもらえると嬉しい」「もっともっと回数が増えたら嬉しい」などがあった。

また、「お感じになった改善点をお教えてください。」の設問に対しては、「わかりやすく大きな声で話してほしい」「表情が硬い」「パネルボードの位置を高くしてほしい」「歌をしっかりとってほしい」「服装が気になる」「動作は大きくしてほしい」といった記述があった。

学生は、「保護者アンケート」における評価に対して大変敏感であった。アンケート実施後、学生はすぐにその記述内容を見ることを望んだ。そして、好意的な温かい言葉を見つけては感激し喜びがあった。金城悟・金城久美子¹⁾は、パフォーマンス終了後に観客に実施したアンケートの学生への影響について、「観客からの好意的な評価はこれまでの活動に対する慰労の自己肯定感につながり、これからの活動におけるモチベーションの向上に寄与している」(2012)と述べている。

保護者から指摘された改善点については、それを真摯に受けとめる姿があった。「わかりやすい話し方で」「もっと大きな動きで」など今まで様々な演習授業で指導されてきたであろう内容も、保護者からの指摘は、学生にとって特別なものであったようだ。

このように「保護者へのアンケート」は、学生の自信や喜びにつながったと同時に、パフォーマンス技術の改善、さらには保護者理解に役立ったと考えられる。

(4) 学生アンケート

自己採点と自己評価の平均の変化、それぞれの標準偏差・サンプル数を、表1と表2に示す。

自己採点の平均は、11月に若干下がっているが、概ね回を重ねると共に上昇している。分散分析の結果、4つの平均には、有意水準5%で有意な差が認められ、11月を除く3つの平均で

表1 学生による自己採点

活動日	平均	標準偏差	サンプル数
5月13日	52.5	7.07	8
5月31日	63.9	11.67	9
6月7日	71.3	9.91	8
11月1日	60.6	10.84	8

表2 学生による自己評価

活動日	平均	標準偏差	サンプル数
5月13日	-0.25	1.04	8
5月31日	0.11	1.05	9
6月7日	0.75	1.17	8
11月1日	0.50	0.93	8

は、有意水準1%で有意な差が認められた。

11月に自己採点、自己評価が下がった原因としては、6月から5ヵ月のブランクがあり、学生のモチベーションが下がったこと、また、ブランク期間に実習を経験しており、そこでプロの先生方の仕事を目の当たりにしたり、指導を受けたりして、自己採点・評価の姿勢が学生なりに厳しくなったことなどが考えられる。

自由記述においても、変化が見られた。活動初期には、自分のパフォーマンス技術についての反省、自分の緊張や不安感についての記述が多かった。その後、活動回数が増えるに従い、子どもたちの様子について、さらには、「お母さんも楽しそうだった」「お母さんにもわかりやすかった」など保護者の立場に立った感想を述べる学生が増えていった。

(5) ビデオ映像による振り返り

学生は、6月17日の活動を、ビデオ記録を見ながら振り返った。良かったところとして、「笑顔だったのがよかった」「声がよく出ていた」「子どもたちが集中していた」などの意見の他、改善点として、「ビデオで見ると動きが小さい」「次に移るときに間ができてしまっている」など、映像を通して初めて気づく反省点に触れることもできた。また、「お母さんが嬉しそう」「やり方を見せてあげることでお母さんもすぐにできた」など保護者に対する記述も多かった。

6. おわりに

計4回の活動を通して、学生の意識が、自分中心から子どもたちへ、そして保護者の様子を含んだものへと変化していったことは興味深いことであった。黒田秀樹²⁾は、保育者に求められる専門性として、子どもの問題だけではなく、『「親」に寄り添う力、「親」を理解する力、「親」を支える力』の必要性を述べている。このことから、学生の意識変化は、活動における一定の教育効果であると考えられる。

無記名の保護者アンケートは、学生と親を結ぶコミュニケーションツールとしての役割を果たした。アンケートの評価と自由記述は、子どもたちの代弁者である保護者からの発信であり、それを受けて次回に臨む学生の姿勢は、保護者と子どもたちへのメッセージであった。

学生は、ボランティア活動を通して、子どもたちと保護者との関係の中で意識を変化させた。それは、パフォーマンス技術の改善の機会となっただけではなく、子どもたちと保護者に寄り添うという姿勢の学びであったと考えられる。

数回の経験ではあったが、ここでの学びが保育現場の実践に生かされることを願っている。

謝辞

本研究を行なうにあたり、ご協力頂きました保護者の皆さま、倉野良弘さんにお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 金城悟・金城久美子 保育学生による保育技術を生かしたボランティア活動の教育的効果—人形劇を中心とした実践活動から—、東京成徳短期大学紀要、45、33—66 (2012)
- 2) 黒田秀樹 子どもと親に寄り添う保育者の専門性、「発達」No.118 ミネルヴァ書房、9—15 (2009)
- 3) 師岡章 保育者と保護者の“いい関係”保護者支援と連携・協力のポイント、新読書社、(2010)
- 4) 木本有香 学内子育て支援における学生の育ちについて—学生と保育者をつなぐ「気づきノート」より—、日本保育学会第66回大会発表論集、(2013)
- 5) 天野珠路 地域の子育て支援・保護者支援の専門性、「発達」No.134 ミネルヴァ書房、34—39 (2013)